



#### 四（死体検案書）

氏名…（略）女 生年月日…〇〇年五月十九日・三十八歳

現住所…（略）

死亡したとき…〇〇年十二月二十四日 午後十時（推定）

死亡したところの種別…7・その他

死亡したところ…京都府内（略）アパート前駐輪場

（ア）直接死因…脳幹損傷

（イ）（ア）の原因…鋭利な物体による受傷

（ウ）（イ）の原因…外因不詳

（略）

発病（発症）又は受傷から死亡までの期間…直後

死因の種類…十一・その他及び不詳の外因

（略）

（略）

外因死の追加事項…駐車場で倒れている所をアパートの住民が発見

（略）

その他特に付言すべきことから…府内で同様の死体検案記録十件

死体主要所見並びにその他参考事項…

身長百五十八c m・体重五十九k g・結膜充血・角膜透明・瞳孔拡大・死斑、体前面に淡赤紫色・背中に三筋の割創・右肘・右膝に擦過傷。防御創なし・左鼻腔内に出血と刺創を認める・刺創は左鼻腔から頭蓋底部、脳（特に視床下部から左脳）、脳幹、脊柱内部を貫通、損壊。骨髓液なし

(略)

上記の通り検案する。

○〇年十二月二十八日 午前十時二十八分

京都府保険部医務課 監察医 医師 氏名(略)

検案場所…(略)

引取人住所…現住所に同じ

立会官氏名…(略)

(略)

(略)



「これがヒュージの仕業なのでございますね？」

生徒会役員の茅野調、僧名『澄調』がショートボブの髪をかき上げる姿は、まるで仙女が豎琴を弾いているかのようで、優雅だねえ——と、与謝野ほのほ、僧名『焰蘭』は見惚れた。

同時に、何か弦楽器を弾きたくても弾けないときの代償行動であることも理解している。  
こんな状況だから。

僧房の一階にある寺務所ではブリーフィングが行われていた。

翼彩への言伝を頼まれたほのほたちが、用を終えて食堂院に戻ってきたときに、文部科学省の相談を訊いた円寛から、緊急招集を受けたのだ。

学校の教室くらいのサイズの床間の窓はすべて閉めきつてあり、床に設置された正方形のディスプレイだけが光源となって、その四方を取り囲むように、生徒会役員や阿闍梨が正座していた。

正方形のディスプレイは、普段は胎蔵界曼荼羅と呼ばれる仏教図画として、寺務所の東側の壁に掛けられているのだが、有事の際はアームで床の中心に倒れこんで、丁度曼荼羅の裏面がディスプレイとして機能するようになっていた。

たまに押し潰されてしまう迂闊者がいるのが、構造上の問題として指摘されている。

ほのほはと言うと、大型ディスプレイの自分の座り位置に表示された、死体検案書に書かれた字面を見るだけで、なんとも暗澹たる気分になっていた。

「亡くなった日、都じゃ楽しいクリスマス・イブだよ——可哀想にさ」

検案書の画像を明後日の方向にスワイプして飛ばす。見たくない。

でも、仕方ない。

衆生を護るためには、リリイであるためには、見習いなれども尼僧にそうであるためには、どうしたって人の死から眼を背けるわけにはいかないのだから。

遺体写真を見せられるよりかは精神衛生的にはましである。

調の瞳が、ディスプレイの光を受けて潤む。

「クリスマス・イブの日、ヒュージ災害被害者の慰霊祭が行われていました。食堂院のテレビで見ましたわ。都だって、決して楽しい聖夜ではなかったでございましょう」

ま、そうだよなあと、ほのほが頭を掻く。

「半年前の城陽市るときみたいになさ、都に大小ヒュージの大群が現れて、わかりやすくバーつと光弾吐いて暴れてくれたら出撃しやすいんだけど、こうコソコソ動き回られちゃあね。まさに、京のヒュージはなんとやら」

——紛れ隠れて人を喰う。と、何人かが声を合わせた。

滅多なこと言うもんやおまへん、と円覚がたしなめる。

「あないなぎようさん衆生の仏はんが出た日、思い出すだけでもかなわんわ。脱線はやめて本題に戻りよし」  
円覚が受けた電話は一件の要件ながら、その内容は多岐に渡って彼女を悩ませるものばかりだった。

かけてきたのは、鹿野苑高等女学園を管轄している、文部科学省のヒュージ担当官からである。

昨晚発見された変死体の状況を視た京都府警の刑事部長が、文科省へヒュージ災害か否かの鑑定と、もしそうだった場合のリリイ出撃検討を要請したのだ。

「でもさ、死体検案書には、府内で同様の案件十件って書いてあったよ。今回足して計十一件じゃん。それま

でヒュージだと判断できないなんておかしくない？　こんなグロい手口」

ほのほが言う、そうだよねーと、他の生徒会役員も同意する。

しかし、円覚はちよい待ってやと場の空気を制する。

「ヒュージやと直感で気づくのは、わてらが京のヒュージと戦ってるからや。こんな人知れず起きとった怪事案、警察と言えどもちんぷんかんぷんどす」

京都においては、一般の人々の視点と幾多の戦場を見てきたリリーの視点との間で、ヒュージに対する現実感に若干の乖離かいりがあることが多い。

ヒュージとの戦いにおいて京の都は、京都盆地南部を中心に都市が半壊した状態となっているが、北部——福知山やここ舞鶴などは、単発的な攻防戦こそあるものの、大規模な戦闘には未だ巻き込まれておらず、ヒュージ災害そのものを実感できていない市民も少なからずいるそうだ。

だが、たとえリリーの視点だったとしても、多分ヒュージなんだろうと憶測するだけで、本当にそうであるかどうかは、まだ何の確証もない。こんな攻撃法を行うヒュージのデータは現状存在しない。

確かなのは、何者かが鼻腔びくくから頭蓋をぶち破って視床下部を破壊して、そこから大脳をUターンして脳幹を貫いたのちに延髄内に入り、骨髄液を残らず吸い上げるなどという、不可思議な芸当をしたことだけだ。

人間の道具では非常に難しいし、人間の思考では理解しがたい。少なくともほのほには理解できない。理解したくもない。

ズーノーススの可能性はどうでございましょう、と調が口にした。

「何さ？　ズーノーススって」

「人畜共通感染症のことです。細菌やウイルスでもございますし、寄生虫でもございます。例えばきつねちゃんに寄生するエキノコックスは、肝臓だけでなく、まれに人間の骨に寄生したという症例を読んだことがございます。骨を壊すことができるんじゃないですか？」

「まともな寄生虫なら、一晩で鼻の穴から頭蓋骨に穴開けられないと思うだけだな——と、ほのほが反論する。

でも、もし本当に寄生虫の類なら、体内を不可思議な動きで這い回ってもおかしくない。であれば、それはリリイではなく、保健所の仕事となる。

「円覚様、調つちがこんなこと言ってますけどどうでしょう」

ほのほが調の意見に対しての所見を問う。

円覚は、おおきに、せやけどもうちよいと聞いておくれやす——と話を続けた。

「十一件の連続した事案やと、京都府警が確証を持つに至った経緯があつてやね——」

円覚が、十一件すべての死体検案書を表示する。

何枚かは黄ばんでいたり、担当員の判が黒くて明らかなコピーだったりとまばらである。書式も統一されていない。

行き倒れの行旅死亡人と認識され、丁寧な司法解剖が行われなかったと思われる検案書も見受けられるし、腐敗や膨張が進んでいる状態で発見されたために、損傷箇所がわかりにくかったと察せられる検案書も複数ある。白骨化した死体もある。死後、山火事のあおりを受けて、土に還る寸前だった死体もある。

同じ状態で発見された死体はひとつもない。

しかし、鼻腔真上の頭蓋下部に穴が開いているのなら、腐敗しようが腐乱しようが、頭蓋全体が粉碎されな



いかぎり刺創は残る。

すべての検案書に共通しているのは、『刺創しそうちょうは鼻腔から頭蓋へ貫通』という記述のみ。これが、心許こころもちない細さではあるが、事案と事案を結ぶ糸の一本であることに変わりはない。

一番最初の黄ばんだ死体検案書の日付を見て、はっ——と調が息を呑む。

「最初の事案は、十四年前でございませうか？」

「そう。事案と事案の間がかけ離れ過ぎて、連続殺人として認識されへんかったんや。そもそも事件と認識された事案は多くなかったかもしれへんね」

確かに、連続性を感じられないぐらいに長い。最初はいったいどういう素性の変死体なのか、捜査員も監察医も、狐につままれたような感覚を覚えたに違いない。

「せやけどな——これがとんととわかりやすくなつて来ます」

円覚が死体検案書の、死亡推定時刻の日付を指差す。

最初の事案は十四年前で、同様の事案はこの年一件のみ。

二件目は十二年前。三件目は十年前。

四件目は八年前。五件目は六年前。六件目は四年前。

七件目と八件目は二年前、九件目と十件目、そして十一件目が今年。

「だんだん仏さんの出る間隔が短うなつて来とりますやろ」

「これ——ひとつも報道されてないよね——」

「なぜもつと早く——私たちに——」

年間に発見される国内の変死体、その数はおよそ十万を超える。

その中から十四年分で十一体の変死体のデータを絞り込んで照会、いよいよヒュージの仕業ではないかと思  
い至り、文科省に出撃検討を要請した捜査過程は、結果的にバトンがリリイたちに託されたものの、それまで  
にさぞかし難儀をしたであろうことがうかがえる。

きつと独自に辿り着いたというわけではなく、ある程度文科省のアドバイスによるキャッチボールが行われ  
たうえで、ヒュージの仕業との疑いを濃くしたのだろう。

「京の外れはまだヒュージ災害が少ないもんやから、なかなかヒュージとは思わんかったんやろし、確信のな  
いまま報道すると混乱を招くと考えはったんかね——。後手後手になってしもうたけど」  
過ぎたことはしゃあないどすと言つて、円覚は肩を落とす。

「刺創しか共通点はないのでございますか？」

小首を傾げる調に対して、円覚が人差し指を立てる。

「京都府警が当時の周囲の状況を調べはったんや。ほしたらそれぞれの案件を括るに値する、確信的な事実を  
掴まはったんや」

それが電話の要件の、次の話題か。

「まず、十一人の仏さんたちには性別含め、なんの共通点もおまへん。おまへんけどな——」

円覚が、これ報道されへん情報になるさかい、内緒にしとつて——と、周りを見回して口に人差し指を当て  
る。

生徒会役員と阿闍梨たちが一斉に、円覚に顔を寄せる。

円覚が、重く、重く口を開く。

「——御詠歌が」

えっ？ と、ほのほが聞き返す。

「御詠歌が聴こえたらしいんどす」

それぞれの事案の死亡推定日時、死亡推定時刻の前後に。死体発見現場の周辺で――。

生徒会役員だけでなく、阿闍梨たちもざわついた。

「御詠歌って――あの、いつも私たちが歌っているあれですか？」

「あれどす」

円覚が、持鈴しれいを持つような手つきで、ちんと鳴らす仕草をする。

御詠歌は、法要や巡礼などで歌われる仏教文化独特の歌である。

宗派や流派によつて様々な種類があり、鹿野苑高女でも修行の一環として習わされ、行事のたびに皆で合唱する。

ほのほがヒュージに大打撃を受けた神戸へ巡礼に行つたときは、大雨の降るなか、リリイ全員で鈴を持つて歌いながら歩いたこともある。

仏の教えをしたためた歌詞は尊く、安らかではあるが、曲調は押し並べて寂しい――と、ほのほは感じる。「あの抹香臭いやつか――あんまり好きじゃない」

隣に座っている調に、あれ歌いやすいよう即興でヴォサノバっぽくアレンジしてくんない？ と頼んでみたが、ギターを取り出した調に、ノイヤでございませうと即興のヴォサノバで返された。

「こら、不謹慎や。あんさんら何ちゆう神経してはりますか」

本当だと思つた。ほのほと調は肩をすぼめてフリーズする。

すぼめたまま、ハイ、と調が小さく手を挙げる。

「つまり——一連の事案には仏教関係者が関与しているということですか？　というか、本当にヒュージの仕事なのでございますか？」

少なくとも、決まったスパンで事案が発生している時点で、ズーノーシスの線は薄くなった。

「そりゃ京都府警の人だって、ヒュージかどうか迷うよね」

頭を掻くほのほに、頭痛いやろ——と円覚が力なくつぶやく。

「電話の最後の話題やけど、これがいつとう頭ん痛い情報どす」

ちよい見ていておくれやす——と言いながら、円覚が床面のディスプレイに、京都府西部の地図を表示する。

そこに、十一枚の「死体検案書」の画像のうち一枚をスワイプする。

流れた死体検案書の画像は、地図上にある死体発見地点でピタリとストップする。

〔死体検案書〕

円覚は、それぞれの検案書を次々に、発見現場にスワイプする。

〔死体検案書〕

〔死体検案書〕

えっ——あれっ——と、どこからか声が漏れる。

〔死体検案書〕

〔死体検案書〕

〔あ——〕

〔死体検案書〕

その度に、ディスプレイの光を下方から浴びた、阿闍梨やリリイたちの顔色が蒼白になる——ように見えた。

〔死体検案書〕

〔死体検案書〕

「これは——駄目でございます」

調が大きく息を吸い込み、口に手を当てる。

〔死体検案書〕

〔死体検案書〕

最後に円覚が、昨日発見された死体の検案書をスワイプする。

〔死体検案書〕

全員がざわめく。

「見たとおりです」

遠近の差はあるものの、すべて、鹿野苑高等女学園がある——この御山を囲むようにして死体が発見されていたのだ。

御山そのものが日本海に面した場所にあるので、正円とまではいれないが、下弦を描くように「死体検案書」の画像が並んでいた。

「ヒュージかどうかわかんないけど、とにかくこの御山を拠点にしている可能性が高いってことか」  
調がほのほを見て、灯台下暗しでございませう——と髪をかき上げる。

「これが表沙汰にならばつたら、わてらの防衛責任も問われますな」  
円覚がため息をつく。

「どうやって動いてる——ステルス飛行してるタイプかな——」  
ほのほの推察に、違いますやろね——と円覚が腕を組む。

御山には鉄条網のような物理的結界のほかにも、法力による半円状の不可視結界が張られているらしい。堅強なギガント、アルトラ級でもない限り、ヒュージたちは結界に弾かれて、御山の内外の境界線を越えることができない。

「それにな、なんとなくやねんけど、人間の鼻腔を狙おうとしたら、下からしますやろ？ 空を飛ぶタイプのヒュージが鼻腔を狙いますやろか——？」

ああ、急に何の話をおもったら、ヒュージの視点から考えたらどうかって話ですか——とほのほはつぶやいた。

「だとしたらもう消去法でございます。ヒュージはケイブを使って移動しているとしたら考えられませんね。しかも、超小型の」

調が弦を鳴らすように髪をかき上げる。

ケイブは、幾つかの種のヒュージが使う移動習性である。

空間にケイブと呼ばれるワームホールを掘って、そこを自由に移動するのだ。ワームホール内は異空間なので、どんなに強固な結界が張ってあっても、おかまいなしに結界内に侵入してくる。

ケイブ発生時にはヒュージ粒子が漏れ出すため、一定サイズ以上のケイブなら発生地点の予測ができるのだが、京のヒュージは極小のケイブで移動する小型の単体も存在するため、粒子の発生地点を捕捉できず、何回

も苦戦している。

逃がしやしないさ——とひとりごちて、ほのほは自分の左掌に拳を叩きつけた。

調が生徒会役員や阿闍梨を見回して、最後に鋭い視線でほのほを見据える。

「じゃあ——早速網を張っておびき出しましょう」

「どうやって」

♪そこは皆で考えるのでございますと、ギターを爪弾く。

「何だこいつ」

「ほなこれから、報せ地蔵はんを使って一定範囲内のヒュージ粒子を測定することにします」

円覚が少しだけ声量を上げる。

『報せ地蔵』というのは、京都府内三千八百箇所に設けられた、鹿野苑高女独自のヒュージ粒子感知計測システムである。地蔵の形をしているためにこう呼ばれる。なにしろ大量に設置してあるので、微細なヒュージ粒子ももらさずに観測することが可能だ。

ヒュージ粒子とマジのエネルギーがぶつかりあつたときの反応を測定する構造であるため、遠隔操作でマジを放出できるリリーの能力が必要である。したがってあまり長時間稼働させているわけにはいかず、ヒュージ出現の可能性が疑われた場合のみ、範囲限定で起動させる。

今回は円覚自身が、実戦にはもう堪えられないほど衰えてしまったリリーの力を振り絞って、システムの起動とヒュージ粒子のモニタリングを行うつもりらしい。

床のディスプレイを操作して、京都北部にある、他宗含めた寺社仏閣に一齐起動信号を送信する。各施設の

管轄区域にある報せ地蔵を起動するのだ。

これで京都府西部の地上には、ケイブ移動型ヒュージ用の網が張り巡らされたことになる。

円覚がばんぽんと手を叩いて、天網恢々疎にして漏らさずや——と言いながら、ディスプレイを指さす。

「ヒュージの等級はわからしまへんけど、行動できる範囲は舞鶴市とその周辺であると当たりをつけて、まずは八部衆を三隊出します。光潤隊、輝礼隊、焰蘭隊としまひよ」

鹿野苑高女における、ケイブ移動型ヒュージの探索は、報せ地蔵に頼るだけでなく、リリイたちの足も使う。CHARMをつねに起動状態にしながら移動することで、報せ地蔵より広範囲かつ強い反応で、ヒュージ粒子とマジの反発を発生させるためである。

しかし、報せ地蔵で測定したヒュージ粒子を観測できる機材は、あくまでこの寺務所に据え置きされた大型のものだけであり、索敵中のリリイたちがヒュージ粒子を観測するためには、寺務所のオペレーター、今回であれば円覚から、車輦内に搭載されたディスプレイにモニタリング映像を転送してもらう必要がある。

あくまで寺務所的大型機材と、能力者であるオペレーターの連携が必要な探知方法なのだ。

「光潤隊は御山を索敵しておくんまし。輝礼隊は、御山を中心として、府道二十一号線の国防軍舞鶴病院から時計回りに四十五度の範囲。焰蘭隊は府道四十五号線、白鬚神社はんのあたりから、反時計周りに搜索してくんまし。合流地点はそうやね——旧真倉駅跡にしまひよ」

うわ——というどよめきが漏れる。

比較的人口の多い市街地を搜索する輝礼隊と違って、焰蘭隊は由良ヶ岳に隣接した田舎の一本道を延々と移動するはめになる。



陽が落ちれば、とてつもなく昏く長く、淋しい道となるのだ。

生徒の一人が、車輛での移動では駄目ですか——と聞く。

円覚は、感知の精度が落ちるけどまあ距離が距離やから、そないなりますな、と言つて頷く。

「わてが地図をモニターしとりますから、報せ地蔵はんがヒュージ粒子を感知するか、あるいはあんさんらの C H A R M のマジとヒュージ粒子の反発が強うなつたら、移動車輛のモニタにも表示されとるやろうけど、こつちからも連絡します。交戦が始まつたら、場合によつては近くの隊も合流してもらいます。ヒュージからの急襲も十分にあり得るさかい、みなはん索敵さくどくにマジを使うやろうけど、なるべく温存してな。それと C H A R M は万全の状態にしといたつてや」

ディスプレイに視線を遣つたほのほは、京都府西部の山々に記された大量の等高線を見ているうちに途方に暮れて、軽い目眩を覚えた。

おきばり——と言つて、ブリーフィングは終了した。

阿闍梨やほのほたち生徒会役員が立ち上がったところで、ちよい待つてや、と円覚が止める。

突然の呼び止めに皆が振り向く。

「光潤隊はん、索敵するのはええんやけど、西の崖にある庵には近寄つたらあきまへん。くれぐれも気いつけやっしや」

どうしてですか？ とほのほが横から口を出した。

その情報は入学したときから聞いてはいたが、禁忌きんぎのようでなんとなく聞きづらかつたのだ。

円覚はほのほの眼を見つめながらしばらく沈黙したのち。

あそこには、破戒が棲んどりますよつて——と告げた。

ほのほは口を尖らせて、一瞬考えたあと、うちらは関係ないか——と一人頷くと、自分が束ねる八部衆レギオンの手綱をどう引くか、そのプランに思考を切り替えた。

十四年間で十一回、逆に考えればそれしか襲撃してこなかったレアヒュージだったとしても、無の世界に隠れるわけではない。搜索範囲内のみずこかに、ほぼ必ずいるのだ。

「無事に帰ってきて、護摩祈願会で甘味食かんみべまひよな」

料理上手の円覚が元気づけてくれる。

ほのほは、料理は不得手だが、ヒュージ討伐には自信がある。

さあ——闇夜の鴉をどう料理してやろうか。

うちは精鋭というよりキワモノみたいな連中だから、統率だけはしっかり取らないと。

他のリリイたちと一緒に寺務所を出ようとすると、そこには二年生で別の八部衆を束ねるリーダー——みぶ壬生輝凛きらり、僧名『輝礼』きらいもいた。

炎のようになびくショートヘア、百七十センチを超えるモデル体型の長身、そして情熱と書かれたヘアバンドを見れば、誰でも彼女だとわかる。どんぐり眼と少し太めの眉は、朴訥な雰囲気カオシユを漂わせる一方で、何者にも折れない強い意志をも感じさせる。

南インドで幼少期を過ごしたあと、台湾で三日三晩、高雄牛乳大王とやらと死闘を繰り広げてから日本に来たと云う。真偽のわからない経歴を持った帰国子女だ。

ガーデン一の体育会系女子としても、カリスマ性の高いリーダーとしてもその名を轟かせている。同じく体育会系のほのほとも気が合う。

ほのほは輝凜たち——と言いながら、制服の袖を引つ張る。

「輝凜たちとは、どういう作戦で戦う?」

輝凜はほのほに振り向いて、しばらく考えたあと。

「やっぱ最後は情熱パワーって感じじゃないツスカ? とつぶやいた。」

「こいつ——無策のまま戦い抜くつもりだ。」

ほのほの開いた口は、しばらく塞がらなかった。

(続)

---

---

## 四(死体検案書)PDF版

発行日 2018年2月4日

著者 DOGMASK  
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---